

ディスカッション

(永田)

お戻りになっていらっしゃるのでしょうか。そろそろ再開したいと思います。

いくつか質問をいただいております。その質問を下敷きにディスカッションへとつないでゆきたいと思います。先ほどお二方のお話に関して、ご質問が出ております。

まず、渡部先生に対して「図書館員の質を上げるためには、まず地方公務員法など、法を変えていく必要があると思います。」これはコメントですね。括弧して「1年などの期間を区切った雇用では、質を上げるのは難しい気がします。長く雇用され、生活が十分できる賃金で働くことができれば、腰を落ち着けて勉強できるんですが。前に働いた図書館では、一人で朝9時から夕方5時まで回す必要があったことが複数回ありました。これで時給800円では、利用者への満足なサービスは無理だと思います。こういった現状はなんとかならないでしょうか」という質問です。よろしくお願ひします。

(渡部)

なかなか、難しい質問ですけど、やはり国の諸制度を変えないといけないと思うし、学校教育は充実した基盤の制度があって、学校の先生は専門職の位置づけです。

50万人近くの学校の先生が小中学校に配置されています。かなりの人数となりますが、図書館員は、こんな多い人数ではありません。やはり国も国民の両方が、学校の教員は専門職であることを認知しているわけです。司書が専門職として認知をされていない現状ではなかなか難しいと思います。だから、そこは卵が先かニワトリが先かの論理になってしまいますけど、一方で国が制度として取り組まなくても、地方自治体によって取り組む可能性だって残されています。私がいた愛知川図書館では館長になるためには、まだまだ司書資格の必要との条例規則が残っているのです。司書資格がないと館長になれないのです。

だから、そうやって自治体独自で専門職を育てるということが認知されれば、現状でも、多少は専門職の配置が可能でもあるということでしょう。ご質問には的確に答えられませんが、やはりこのように、国民が、司書が生涯働き続ける専門職として、国の要になるというぐらいの運動とか、そうしたものが無い限りは、今のままを繰り返すのではないかと思うのです。

結局は、資料費を削られて人件費を削られるなかでは、現状では図書館制度が先細りといえるのではないかと思います。

(永田)

ありがとうございました。図書館員の質を上げたいということで、公務員法のあり方の質問でした。

一方、吉本さんは、図書館というものはこれから始まるんだというようなことをおっしゃっていらっしゃるんですが、吉本さんはその辺り、図書館に働く人がどんなふうにあったらいいか、あるいは、これからの図書館員、ただどんなふうにお考えか、少しお話しいただけま

すか。

(吉本)

そうですね。結構、難しいテーマで、なにかあんまり軽はずみなことをいうと、ホリエモンのような発言しかできない感じがしているのですけども、ホリエモンのような発言を最初にしようと、早く諦めて、ギブアップして欲しいですね。まあ安い給料で働く人がいるから、そういう仕事が生まれてしまうのであって、働いてはいけないのだということです。そういった前提で多分、図書館的な仕事っていうのは、非常にいっぱいあって、カーリルのなかでももちろん、図書館司書の資格をもっている人が2人いますし、いろんなところで図書館の仕事に役立つと。

でさらにですね、多分これから始まる、コミュニティとかそういったところの議論からいうと、図書館がなくなった未来からみて、多分、みんなまた図書館つくりたいってなるんですよ。そうなったときに、町で図書館をつくろう、例えばそれが大きな建屋ではなくて、マイクロ・ライブラリーっていわれるような、小さな図書館活動の取り組みとか。こういう図書館の芽は、非常に沢山あってですね、むしろ今後将来がある人であれば、そういう新しいところを積極的に伸ばしていくっていうのが、割と早い解決策じゃないかという気が僕はしています。

(永田)

先ほど、渡部先生のお話では、図書館を担う人には専門職の人が居て、それから専門職を支える人もいて、もう一つ、構想をする人っていうか、3種類の図書館にかかわる人を想定されておりました。図書館員を十把一絡げで話が進めていいわけではないようです。

また、吉本さんのお話からいえば、改めてマイクロ・ライブラリーをつくっていくようなことを始めても結局、担っていく図書館員は必要なんだから、その展開を自分たちでうまく考えるようにしなきゃだめよと、おっしゃられています。図書館の外からはそうみえるというお話でありました。

制度を、その原点をきちっと踏まえて、整備していかなくちゃいけないのかなと思います。

それで、図書館が然るべきサービスを行っているか、図書館で然るべきサービスを行うために、司書が問題にきちっと対処する必要があると思います。そこらあたりから次の質問に移ってゆきたいと思います。

実は図書館を運営する方法は、現在は必ずしも直営だけではないんですよ。民間活用あるいは公民連携のあり方というようなことも改めて話題になっております。こんな質問が来ております。これも大変、難しい質問ですが、民間活用、公民連携のあり方、現行制度の課題と役割分担の理想はどのようなものかという質問がきています。図書館に関して民間活用や公民連携のあり方、いかがでしょうか、渡部先生。

(渡部)

なかなか難しいご質問なのですけど、例えば図書館では建物を公が造るわけではなく、民間が造って、建設会社が実際に造っていますし、だからそれはその公がやる部分と民でしかで

きない部分があります。

そこはいろいろとですね、やり方もあるし、公だけが全てではありませんので、例えばその図書館のなかにこういう民間の手法を取り入れる格好がステータスになっているところがあるかもしれませんが、例えばシュトゥットガルトの図書館では、有名な某喫茶店はシュトゥットガルト図書館の前であって、向かい側の図書館には障害者団体が経営するカフェがあったりしますので、それは自治体の判断によると思いますが、全てが公、全てが民というより、棲み分けをすることが、重要かもしれませんが、結局はその住民の方が、最後は判断するというところに行き着くと思うのです。

両方のよし悪しを十分に吟味して、そして議論の末、選択するのは最後に住民の皆さんが判断を下すことが、良いと思っています。

(永田)

はい、このことに関してはですね。先ほど、ご講演で吉本さんが非常に重要なこととおっしゃっておりまして、「必ずしも公だけが社会基盤を構成するんじゃないよ。現在では、例えば Google だって Amazon だって社会基盤でしょう。それをみんな使っているのですよ」とおっしゃっていました。

このことについては、もう少し言葉を添えていただいた方がわれわれの理解が進むと思いますので、ちょっとそのところを繰り返してご説明ください。

(吉本)

そうですね、あのう、それはやっぱりカーリル設立からずっと考えている部分で、まあ例えば、さっき離島の話がありましたけども、例えば Amazon は、海士町でも沖縄でも送料無料で届けるんです。送料無料で届けないのは、多分、行政では難しいでしょう。いやあ沖縄だと高いですねとかかなっちゃうと思うんですね。で、なにかそこがちょっと僕はずれていく気がしてですね。行政の方が、そのデバインドを拡大しているのではないかって、ちょっと感じている。

もう一つ思っていることが、そういうなかでグローバルな目線というか、信頼できる企業って、だいたい日本の会社がないという状況です。まあ皆さまどうかわかんないですけど、日本の会社そんなに信頼できないのですよね。当然のように嘘つく。東芝があれだけの事件になった時点で多分、もう信頼できないわけです。で、そうなってくるとみんな海外の会社をどうやら信頼し始めている。それは、Facebook であつたりとか、Twitter であつたりとか、まあそういうのって結構続くでしょう。

で、Google は続くよねっていう安心感がなんとなくあつて暮らしている。なにかこれってむしろ政治に近い気がします。こういうところの話では、社会的合意の形成みたいなところが非常に重要になってきた。

特にインターネットの世界とか、情報の世界っていうものが、もう国境を越えてどんどんいくなかで、あんまり日本の法律とか、日本の制度とか、ぶっちゃけ、関係なくなつてきていて、本当にそれが良いだろうか、正しいだろうかみんなが思っているようなとても曖昧

なものしか拠り所にできなくなってきたのかなって気がします。で、そういうなかでやっばり、企業としては公共性っていうのは、とっても重要になってきているし、それがなければ多分、成立しない状況になってきているのではないか、それは企業にとっても生き残りとして必要なことになっているのかなって思っています。

(永田)

必ずしも公だけが社会基盤の責任を負うわけではなくって、われわれの日常生活を支える社会基盤のほとんどの部分は、民間会社によっているってことは確かです。

ですが民間会社が信頼できるかといえば、東芝や三菱自動車の例もあり、あるいは東電だってそうだったように、信頼性を欠くという問題がある。一方、公が確実に信頼できるかって問題もあります。それなりのセーフティな組織だという建前ですから、それをより信頼するということでした。しかし実際はいろいろなことがあります。いずれにせよ、われわれは官民併せて社会基盤を形成したり、コミュニティを支えたりしているという話だと思いません。

この質問、民間活用、公民連携のあり方に関しては、私どもに対する質問でもあります。この「未来の図書館 研究所」は、株式会社でありまして、これをつくったときに「なんでNPOじゃないの」っていわれました。実は、現在私人が一定の組織をつくるのに、もっとも自然な組織は、民間会社なんです。そこから始まるわけですね。初めから公的な補助金でもいただけるならNPOが設立できますけれども、そうは簡単にはいかないわけですね。そんな経緯もありまして、会社組織から始めました。民間でも社会基盤形成に寄与できるということでございます。

ただ、こういった議論は、皆さま方のお考えもいろいろありましょ。どなたかこれについてコメントございましょうか。

フロアの方でなにか、ご発言があればお招きしたいと思うんですがいかがですか。

特に、コミュニティに関していろいろ活動なさっている方にとって、この問題は重要かと思うんですがいかがでしょうか。今すぐにではなくても後ほどでも結構でございますから、是非ご発言をと思います。

そして重い話題が続きましたので、少し気楽に答えられる問題に移りたいと思います。吉本さんにまず「どうしてあんなに検索が速いんですか、うちの自治体の人に教えてください」ということでした。

(吉本)

Googleとかでは出てくるのが当たり前なのであって、むしろ遅い方がなぜかって話になのではないかなと思っています。遅いってことは、なにかをしている、多分すごいことをしているのだと思います。で、なんで速いかというとなにもしてないから速いのですね。そのまま出せば、さらっと出るっていう話があります。

で、このなかで唯一あるとすると、キャッシュという考え方を使うことでもものすごく速くなる。これなにかっていうと、ほとんどみんなが見ているものは同じであるということで、

ロングテールな部分もあるんですけども、みんなが注目している部分というのは、かなり偏っているってことによって、より使われる部分を前に出しておくっていう当たり前のことをすることによって、速くなるということです。

で、このキャッシュの考え方っていうのは、図書館サービスでもいろいろ使いようがあると思っていて、これはキャッシュ・アルゴリズムとか、LRU とかっていうんですけど、なにかっていうと、実は除籍アルゴリズムなんですね。

キャッシュは、一定時間必要になったものを使いやすいところに置いておくわけですけども、全部置いといたらどんどん溢れちゃうので、要らないものをどんどん捨てていくわけです。つまり、新しいものをどんどん置いていって、よく使われるものを置くんだけど、ここで重要になるのは要らないものをどう捨てるかっていうアルゴリズムがうまくいっていると速い。

これは Google であつたりとか、Amazon であつたりとか、あるいはカーリルなんかは、日々そういうことを考えながら研究開発しているところで、これ図書館にもっていくと何ができるかっていうと、より利用しやすい資料を前面に出していく、末端の図書館に展開していくっていうことを本当にちゃんとそういうアルゴリズム使ったときには、もっと図書館楽しくなるんじゃないかな、そういう可能性もちょっと今、この話をしている感じました。

(永田)

いかがでしょうか。質問なさった方、満足されましたか。

昔、システム屋さんと一緒に OPAC をつくったりしていました。何年かぶりに担当者に会ったとき、その彼が当時をふりかえってっていました。Google が出たときに、どうしてあんなことができるのかわからなかった。同じようなことが、まだ起きているということなのではないでしょうか。

私が最初の趣旨説明で申し上げたように、わが国の公共図書館のシステムは、決して満足なものとはいえません。性能、速さの問題だけではなくて、インターフェースや標準化等でも、ひどく遅れています。この違いは、欧米の公共図書館のものに比べると、歴然たるものです。そして同じ図書館システムと契約をずっと繰り返している、このような旧態依然の動きについて危惧しているところです。カーリルの方々が今、横断検索の試みに目を向けていらっしゃいます。さらに、図書館で使っているシステムをも改善してくれると本当に助かると思うのですが。

それはともかく、未来の図書館を考えるのに「図書館はなんなのか」、そして「そこで行われていることはうまく行っているのか」、「きちんとやっているのか」ということをまず確認する必要があります。ディスカッションの論点(図2)にある「図書館サービスはしかるべく行われているか」では、具体的に a (必要なサービスが用意されているか)、b (サービスの普及に配慮があるか)、c (サービスは公平に行われているか) と三つ列挙してあります。人によりますと、図書館の方々は、少なくとも a のところを割と考えているけれども、b、

cになるとちょっと弱いよねといえます。

例えば b という部分ではですね、お二方も触れられたユニバーサルなサービスを提供しているかどうかという問題です。来館しなくても図書館が重要だと考えていることは多いけれども、住民に来てもらえないという現実がある。登録者の比率をみると、例えば、デンマークなんていう国は 60%ぐらいある。アメリカでも 50%を越している。しかし日本は、実は他の自治体の住民を含めて登録率を嵩上げていますから、よく 30%とか 40%のって数字が出ますけれども、居住者だけで比率をとったら 10%ぐらいなのです。この 10%と 50%の差は大きい。図書館がない地区の問題もありますが、図書館のあるところでもやっぱりそういった問題をどうしていったらいいか、特に非利用者の取り組みをどうしていったらいいかという問題もあります。

渡部先生、例えば非利用者の取り組みはどういうふうにしたら、よろしいのでしょうか。実践ではどんなことをなさったのですか。

(渡部)

いくつかの図書館の新設にかかわってきました。長崎の森山町立図書館では、開館 1 年目でその人口が 5500 人の町でしたけれど、約 24 万の貸出をして、そのときは長崎市あたりからも沢山来られて、さらには佐賀県の某市からも結構来られたりしてました。

だけど基本的には、図書館は広域利用ではなく、税金は基本的に住民に返す必要から、次の滋賀県愛知川町では、利用者を限定して、当該町の人たちにサービスを集中することに全力をあげました。それで今の数値は、私は不明なのですが、私がかかわった当時には、人口 1 人当たり約 20 冊の年間の利用がありましたし、登録率も約 60%となりました。それも、当時の愛知川町だけの利用です。

それでさまざまな方々の各層の利用者のことを考えたときに、計画の段階で、いろいろな角度からの図書館の利用予定者を調査しました。図書館に一番遠い方々というのは、外国人の方です。それは日本語が話せない外国人の方を意識しました。

外国人の方々も図書館に安心して来られるような準備、ハンディキャップをもっていらっしゃる方も来られるようなバリアフリー化、そういうさまざまな方々にも来られるサービス準備しサービスを 2000 年の開館後に展開したら、多くの方に来ていただいて、日頃、議会では図書館には消極的な議員さんが、「図書館に行かんと時代遅れだ」ということをおっしゃっていただくような変化もありました。

それでありがたいことに私が満足する予算もつけていただきました。開館前から開館後の 10 年間は人口 1 万人レベルで毎年 3000 万円くらいのお金を認めいただきました。その成果が専門職雇用にもつながりました。

私の手法としては、図書館のオタク、図書館に厳しい意見をもつ人にも満足いただけ、図書館の無関心層にも満足いただけるような、そういう空間構成と司書の専門構成を考えた次第です。

愛知川図書館は、イベントばかりやっているといわれましたけれども、実はそうではあ

りませんでした。それは、自信もっていえると思います。

それともう一つ、官民のことをちょっと申し上げておくとですね、一言で申し上げると官も民もサービスにかかわっていただいているのですが、結局、その図書館が成長する図書館になりさえすれば、どんな形でもよいと思うのです。

学校の先生と同様に終身雇用も待遇も賃金も保障されて、かつ専門正職制も担保されて司書が生涯にわたり思いっきり仕事ができ、社会的な認知度が更に上がって、利用が一層増えていく。図書館の本来の目的を遂げるようなものでしたら、官であろうとどこであろうとよいと思うのです。問題は、そのなか身が10年先、20年先迄どうなのかが、疑問として残るところです。以上です。

(永田)

私も同意します。非利用者の取り込みについて渡部先生は愛知川図書館の実践から語られたと思います。渡部先生がお金の話をなさいましたが、やっぱり予算がなくちゃいけないですよ。予算を取るためには議会を通さなきゃいけない。町民の総意をそちらの方へ向けなければいけない。10%ぐらいの利用者登録率で満足しているところした動きにはつながらないと思います。税金を負担しない住民以外の人にサービスして、その方々を登録者に算入して、それで登録率に嵩上げしているが、なんとか住民のうちの非利用者を利用者に変えていく必要があると思っております。

例えば、次のような分析があります。図3は、ピュー・リサーチセンターで、米国での「図書館利用者（非利用者）のタイプを調べたものです。

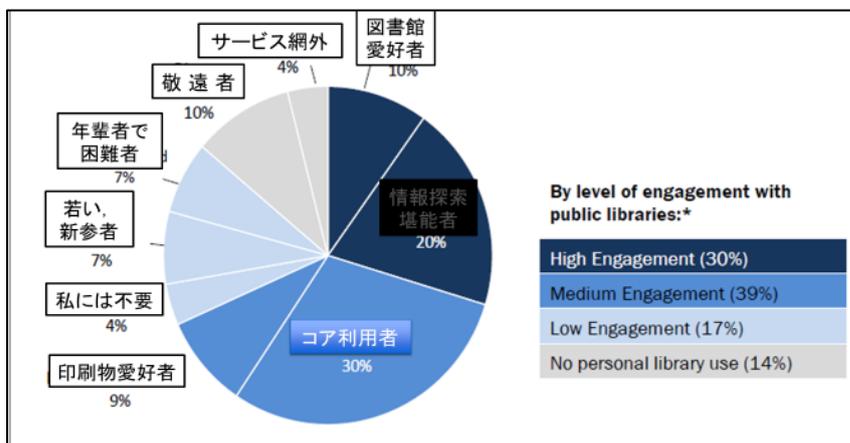


図3 図書館利用者（非利用者）のタイプ（米国）2014

黒い部分は、図書館が好きの人々、あるいは情報に関して非常に関心が高い人々で、合わせて30%がそれにあたります。それに加えて、図書館に来て、サービスを楽しんでいる、コアな利用者が30%を占め、また、印刷物を愛好する人々もいます。

これら全部を合わせると、69%ぐらいが、図書館の日常的な利用者です。一方、これ以外の部分が、非利用者ですが、それぞれに理由をもっています。

われわれの図書館活動で、「こういった分析をやったことがあるだろうか」と思ったりします。やったことがある図書館はありますか、どうでしょうか。

渡部先生のケースでは外国人など、ターゲットグループを探して、そうした人々の利用を促すことから始めている。手をつけていかないと、登録率が上がらないでしょう。登録率が

上がらないということは、社会的にこの図書館の領域の認知が上がらないということです。議会で、その図書館の議論をみんなが賛成してはくれるけれども、迫力をもって、例えば、他の施設よりも、あるいは同程度でよいから強く推してくれると、そういった事態にはならないということだと思います。

また、3番目のcの話（サービスは公平に行われているか（例：一部利用者の優遇は避けられているか、デバイドへの配慮））については、次のような状況があります。最近では、インターネット、ウェブサイトが使えるようになって、「予約」ができるようになった。これ自体は、悪いことではありません。そしてそのことによって利用が増えているという事実もあります。しかし、このことによって、各図書館で新しい本が図書館から消えてしまう。そういった状態になっている図書館は少なくないです。それでよろしいのでしょうか、あるいは、これまで図書館を使ってない方が、図書館に行ったら、「なにも本がないよ」という。そういった事態が招来されますね。現下のサービスのあり方は、常連のお得意様の図書館なのです。

お得意様の図書館をわれわれ経営している。しかし、お得意様は住民の10%程度の方々ですが、そして新たに来た人が、いつも図書館行っても本がないからダメだということでもう端からあきらめて来なくなる。こういった状態がある。「これをなんとか良い方法で技術的に解決する方法はないでしょうか」ということで、吉本さんにいい智慧はないかとおうかがいたい。

（吉本）

今、いわれた問題っていうのは、結構、カーリルにとっては切実な問題でして、まあ例えば、東京都内なんか本当に便利になって、区によりますけども、この区に住んでいると全部リーチできるとか、いろいろノウハウがあってですね、図書館の利用条件によって住む場所を決めようみたいな、まあそういう話もあったりするわけです。

そういう状況でなにが起きているかという、今、新刊が出て、新しい本が出るとわかるととにかくカーリル使って、所蔵あるところに全部予約を入れる、出た瞬間にというような使い方している人、結構多いわけですね。これはこれでカーリル、活用していただいているってことなんですけども、初めてカーリルを使って、カーリルじゃなくても普通に図書館使っていくと、なかなか本が借りられないっていう状況とかやっぱりあるのかなって思います。

で、なんていうんですかね、この辺に関してはさっきいった設計の話が結構、大きいのかなって思っていて、図書館っていうのはどういうふうに使ってもらうかっていうところに関して、割とこう、もっと工夫できるんじゃないかってことが今の質問聞いてて感じました。例えば、なんていうんですかね、初めて使うユーザなら多分「今日借りられますよ」でよい気がしていて、「今月もう10冊借りている人って、もう来月に回せばいいんじゃない」っていうところとかですね。

まあそういうなんていうんですかね、公平性と公正、公正なのか公平なのか、あるいは図

書館にとってのメリット、あるいは全体利用者にとってのメリットなどっていうところも。システムの方で考慮できるところに関しては対処したらいい、例えばその予約の順序とか。図書館システムにおいて今一番ウェイトが大きいのは、多分予約の扱いらしくて、図書館の人とシステムの話をするとなら、予約の話が。システム会社が常に予約のカスタマイズを続けているみたいですけども。だとしたらですね、ここはみんなで集合知をもっとやって、みんないろいろ苦労しているので、もっと知恵を絞れば、もっと賢い予約アルゴリズム、予約順位アルゴリズムってというのが、多分、実現できるんだらうなってことを感じました。

これによってなにができるかっていうと、初めて来て、「図書館ってすごい、使える」っていう体験をやっぱり広げていくっていうこと、ファーストユーザに関して、どうやって拾っていくかってことです。カーリルやっていて、新しいユーザに使ってもらったときに、図書館行ったけど、本がみつからなかったという声がきます。図書館の人に聞けばいい話なんですけれども、初めて行った人、どうすればいいかわからないし、あるいは自分が借りられるかわかんなくて帰って来ちゃったとか。こういう話がカーリルに問い合わせとして来るわけで、もっと拾える部分、いっぱいあるのだからうなってこと、感じますね。

(永田)

興味深い示唆をありがとうございます。一つは、かなり技術的に解決する方法です。そのアルゴリズムでみんなが納得するような順序で予約貸出を優先づける。もう一つは、やっぱりみんなが納得できるというような形ですね、ある特定の方々が、ヘビーユーザが得になるような、あるいはある種の方法を知っている人が得になるような形じゃなくって、最初に初体験のユーザには、ちょっとおまけをつけてあげようとか、それくらいはヘビーユーザの方も、譲ってくださいよというようなことを、みんなで決めることだと思います。まあ制度に絡む話です。

だから図書館の制度がうまくいっているかどうか、これは常に図書館の方々は、点検し、かつ、必要があったら更新しなきゃいけないというようなことだと思います。

ここには、「デバインド」って書いてありますが、格差です。格差の解消、図書館は、ある種、格差を是正するような役割をもっています。そんなところを考えていかなきゃいけないのかなと思います。

(渡部)

ちょっとよろしいですか。

(永田)

はい、どうぞ。

(渡部)

その管理ですね。私は、空間で解消しようと思いました。和歌山大学の図書館もそうですけれども、8千平米に70万冊の本がありますけど、従来の図書館イメージを一新して、「静かに」の空間から脱皮して、しゃべっても良い空間から静寂空間へと1階、2階、3階で階層別に棲み分けをしているのです。それで実は利用が増えました。

愛知川図書館でも、平屋でしたが、タコ足のように棲み分けしたさまざまな空間を用意して、たとえ赤ちゃんが泣いても、静かに勉強する人もいて、両者が一緒に使える空間を館内につくりましたら利用が増えました。

だから、和歌山大学の図書館は、私に関わった改革の初年度から、今は約10万人の利用者が増えています。これは、私は図書館というより東京都の国立市の公民館の関係者や小川利夫氏が唱えた公民館三階建論という理論に学んだことと、永田先生からご紹介いただいたイギリスのウォーリック大学の図書館の1階、2階、3階の3層構造も参考にしました。ダベリングをしたい人と静かに研究をしたい人を棲み分けをすることで利用を図るのです、その発想が新たな利用を獲得したということでありました。

(永田)

はい。この論点の1は、そろそろ終えて次に行きたいと思いますがなにか皆さまの方でこれに関してございますか。

それでは「コミュニティの効果は考慮されているか」という論点の2に移りたいと思います。われわれまずは日々の業務というものに目を向けざるを得なくて、このことを意識はしているのですが、なかなかその意味を確認するにはいたっていない。私どもは本を貸したという事実、あるいは質問に答えたという件数に、目をやるのですが、それで任務は十分に果たしているといっているのでしょうか。まあ図書館だけじゃなく、公共サービス全てがそうなのですが、当事者のわれわれは、これは意味のあるサービスだと思っていますけれども、住民の方々が「これは大丈夫、これは良いものだ」とみんな認めてくれているわけではない。そして、今ではその効果、税金を投入している理由が、問われるようになりました。

したがってわれわれはアカウントビリティというか、われわれの行為を人々にいちいち説明をする必要があります。そんなことで「コミュニティの効果を考えていますか」という二つ目の論点です。

ご質問には、それにかかわるような話は一つ、そのものズバリで「コミュニティへの効果の点について、カーリル上はなにができるとお考えですか」というのが吉本さんに向けられています。

(吉本)

なにか難しい質問ですね。まあカーリルってやっぱり、利用者っていうのは図書館と違って直接みえてないわけですね。1日何万人の人にも使ってもらうんですけども、お問合せのメールというのは、何十通もないくらいですので、ほとんどの人はなにもいわず無言で使って、満足してくれたのか、もしくは満足しなかったのかというのはわからないことなんです。けれども、カーリルの今やっていることの方角性として考えたときには、やはりコミュニティ自体が図書館をやっているこうってときに、それを支援していくことがカーリルにとっての多分、ミッションであると考えています。

多分、行政がやらないよってということが今後あり得る、十分にあり得るなかで、そうじゃなくても多分、図書館ってものやっつけていこうって人は出てくると。そういったときに、や

はり例えばクオリティの高い書誌情報とか、いろいろな基盤が提供されていること、技術が公開されていること、つまり図書館員がやってきたこと自体を、今図書館員にとっては外の世界、ここから先は図書館じゃないっていうところに、もっと展開して行かなきゃいけないんじゃないかということを思っています。

例えば、カーリルって毎日、問い合わせがあって、この所蔵ってどういうことですかとか、この地図が見たいとか、実はそういうレベルの問い合わせって結構あってですね、いわゆる図書館でいうとレフェラルサービスっていわれる、大阪市立のこの図書館に有りますよっていう質問などは、日々、返信しています。だから1回、国立国会図書館がやっている「レファレンス協同データベースにカーリル登録したいんです」っていったら、国会図書館からは、「いやあ、カーリルは図書館じゃないんで」っていわれたんですけど、やっぱりそこだと思っただけですね。

カーリルってすごく図書館だと思ってやっているんですけど、図書館の人からすると、まだ図書館の外の世界だと思っただけですね。そうじゃなくって、多分、図書館のサービスって、公民館図書室にも出ていくし、あるいは市役所にも出ていくし、あるいはマイクロ・ライブラリーとか、カフェにも出ていくのかもしれない。そういうところで図書館的なフルスペックな機能が提供されればいいじゃんということを僕自身は思っていて、ノウハウとか、技術とか、あるいはデータとか、これ結構重要だと思っただけですけど、こういったものを共通基盤として提供していくかってことが、非常に重要です。曖昧な話ですけども重要なことだと、それがずっと巡り巡ってコミュニティとして、なんていうんですかね、やっぱり地域でちゃんと行政も入って図書館をやっているってことに収斂して来るんじゃないかなってことを思ったりしています。

(永田)

いかがでしょうか。ご質問なされた方、よろしいでしょうか。

コミュニティをなぞったものをあげれば、先ほど最後の方で「さばサーチ」ですか、あるいは沖縄恩納村の話だとか、京都府というような行政区域であります。コミュニティの単位のそういう検索の仕掛けを実現しているのは、やはり大きな貢献だろうと思います。そしてなんといっても、カーリルというようなシステムが多くのデータを生み出してですね、われわれの前に、提示してくださっているのはコミュニティの動きを判断するのに有用です。それを使わない方法はないと思います。

ところで、ちょっと違うかもしれませんが、CCCの武雄図書館についての質問が出ています。質問自体はですね、「未来の図書館の形の一つといえるか、個人の感想でいいですから、お二方にお答えください」とおっしゃっています。

武雄市というコミュニティというものを意識されてお答えいただくとありがたいんです。

(渡部)

私は、多賀城も海老名も武雄も訪問していますし、その感想をいえば武雄は、図書館の名を広めたという点で功績大です。

ただその総合評価に関しては、10年、20年とそれが本当に成長していくのか、図書館を使った市民が成長していくような道筋がみえたときにランガナタンではないけど、そういうものが確実に確認できれば、立派なことだと思います。それは一、二年ではみえないので判断は困難です。今後は純粋市民の人口1人当たりの貸出冊数がこれもダントツなのかも注視する必要が少なくとも数年間はあるでしょう。他が批判すれば図書館本来の利用の圧倒的な利用数値（T図書館の純粋市民の貸出密度）をお見せすればいいと思うのです。だからそれは、非常に厳しい要求かもしれませんが、そうやってですね、他を超えるものを提示すれば、よろしいのではないかと思います。以上です。

（吉本）

まあですね。この質問ってやっぱりこういう場になるとよく聞かれるんですけども、あとTwitterとかで、「なぜカーリルは、武雄市に対する態度は、明確にしないのですか」とか聞かれたりするんですけども、あの明確にするものにも、カーリル、そこはあんまり関係ないとか、関係ないってどういうことかという、もっとひどい図書館いっぱいありますので、別に武雄が悪いっていうことは、一切なくて、武雄はむしろちゃんと予算付けられてですね、ちゃんと本が買えるっていう時点で、まあうちの近くの図書館よりはいいところもあったりすると思います。

で、そんな図書館、武雄の図書館でも多賀城の図書館でも海老名の図書館でも、ちゃんとカーリルで探せますから。本が探せないっていわれますけど、ちゃんとカーリルで探してですね、行きつけるかどうかは別に、有るかないかはまずわかります。

是非、ご活用いただいでですね。ただ一ついえることは、例えば海老名の図書館の制度がどうだとか、そういう話はちょっと置いておいて、例えば、NDCの分類以外で本を置くとかそういう取り組みに関しては、非常に良いことだと思っていて、そういう取り組み、本が探せなくなるじゃないかっていうことあるんですけども、やっぱり、そこそがテクノロジーで解決していくべきことだと思います。

そもそも一つの本が一か所しか置けないって一番の矛盾を抱えているわけですから、NDCが完璧なんてことはまずないわけですね。そういうなかで、多分いろいろなトライってのが図書館によって、されていいんじゃないかという気がしています。

だから一つあるとしたら、この議論がやっぱり他の図書館にとって、なにかこうトライする妨げになるのであれば、僕はそれぐらいだったら、武雄は大歓迎だというふうに思っています。

（永田）

はい、ありがとうございます。あのうご質問には、「未来の図書館の形の一つといえるか」という部分がついておりましたが、なにかコメントございますか。

（渡部）

某カフェがそれぞれの都市にあります。先ほどAmazonの話がありました。それを生み出したシアトル市に行き、シアトルの図書館を見たときに、「ああ、図書館ってこのレベ

ルのものだったらいろんなものを育てていくのだ」と思いました。もっともっと大きな存在がシアトルの図書館にあって影響を各方面に与えていると思います。是非シアトルの図書館網の本館と分館をみていただければありがたいです。

(永田)

シアトルだそうです。

(吉本)

僕も行ったことがありますけれども、なかなかやっぱり、良かったですね。

まあ、なんていうんでしょうね、こう、僕今なにをしゃべろうとしたか、忘れました。止めときます。なにか良いこと、いおうとしました。

(永田)

私には質問されてないのですが、私も武雄にも多賀城にも行きましたけど、多賀城で再度その設えをみると、ワンパターンで飽きてきたなという感じがしました。ともあれ最初の武雄では、カフェだとか、あるいは新刊の雑誌が自由に読めるとか、いろんなメリットがありました。ただし、図書館なのに本が探せないのですよね、実は。全く探せない。目録も機能してなかった。そういうところにちょっと難がありました。まあ治っていることを祈ります。

(吉本)

すみません。ちょっとここから脇に入って、やっぱり、こういう状況って起きるわけですよ。で、こういう状況を、やっぱりカーリルは、保証していくっていうのが、やっぱりとっても重要だ。で、やっぱりこれだけ、叩かれた、探せないっていわれた。うちができてなかったんです。そういうことだと思っています。「カーリルがあるからいいじゃん」っていわれるぐらいになりたいと思っています。

(永田)

時間も迫って参りましたが、と吉本さんにまた、質問です。

オープンデータ(公共のオープンデータ)関連の行政の動きと図書館を組み合わせたサービスモデル(図書館の場としての使い方)。後ろの括弧がなにを意味しているか、ちょっと質問された方、ご説明いただくとありがたいです。

(質問者)

元々、図書館というよりオープンデータ界隈のことを、まあ実際、研究したり活動したりしているのでその質問を出させてもらったというのが経緯なのですが、今日のテーマ、主たるテーマが図書館でした。

で、図書館も、特に公共オープンデータも、両方ともが行政が扱っている件で、今、東京都も、まあ結構進めるようになってきた。動きがみえてきているなかで、その知的資本として考えたときに、図書館は知的資本を公共として担う場であって、公共オープンデータっていうのは行政・役所で貯めていた知的資本を公開していこうという動きでそれを組み合わせたようなサービスというのはあるのか。

それと、箱としての図書館っていう存在があって、物理的な場として図書館というのをそういうものと組み合わせて使う方法っていうのはないのかっていう個人的な興味です。

(吉本)

十分にお答えになるかどうかはわからないのですが、この間カーリルという活動を通して、よくオープンデータっていう文脈でも取り上げて、いろいろな人と話していて感じているところというのは、多分オープンデータっていうのに二つ話が混じっていて、一つはオープンデータによって民間企業がビジネスになると、これよくカーリルが呼んでいただく文脈なのですが、この話の一つ。もう一つが、民主主義とか、まあそういったものの根幹としてのオープンデータという文脈が二つあると思うんですね。

この二つをちゃんと分けて考えること重要なことというふうに思っていて、特にビジネスとしてどういう可能性があるかっていうと、それ大したメリットないわけです。だから無理やりビジネスをつくらうとすること自体が、無駄っていうことを、まあカーリルとしてはいつています。で、後者のどちらかというところを知権とか、民主主義の根本であるところのオープンデータっていうものは、図書館に非常に親和性が高いですし、本来、図書館が取り組んでいくことそのものであるという、オープンデータを公開するっていうのは、元々、図書館でよかったんじゃないかというぐらい考えているわけです。

この部分に関して、カーリルの活動で感じているのは、例えば、多摩デポ、さっきの多摩デポジット・ライブラリーの取り組みなんかでは、多摩地域の図書館がみんなで合意形成していくのって非常に大変なことで、それぞれの図書館がそれぞれの自治体によって運営されていて、そこをどうオペレーションしていくかってことに関しては、正直、合意形成できないわけですね。

そういうなかにおいて、こういったオープンデータみたいな、まずはデータがちゃんと出てくるよっていうことが担保できると、いわゆる合意形成する前に、いろんなトライができた、いろんな議論ができた、例えば多摩地域の30館のなかでどれくらい重複した本があつてどれくらい除籍される、まあ捨てられていって、そういったものをもうちょっと量的に捉えていくっていうことが、図書館員ができるようになってきた。

で、これはやっぱりオープンデータというような考え方を導入することの最大のメリットだと思っています。要するに、合意形成を少なくしていく、どうせ合意は形成されないで、やっぱり合意形成をせずに進んでいく、そして社会的合意をとっていく、こういったプロセスにオープンデータは非常に重要です、図書館のデータっていうものもやっぱりそういうなかにあつて、図書館が要るのかって議論そのものにとっても重要なものじゃないかなというふうに思っています。

そういう意味ではですね、やっぱり、例えば図書館の統計データみたいなもの、現状だと日本図書館協会というところが100万円ぐらいで売っていたりするわけですが、こういう状況をやっぱり変えてかなきゃいけないと思っています。図書館自体が本来、図書館の情報を外に出していくことがミッションであるにも拘らず、例えば図書館の一覧その

ものが 50 万円で売っていたり、まあそういう、ちょっと歪な状況になっているってことに
関しては、カーリルはやっぱりいうべきことはいっていきことはやっていかなければいけ
ないなと思っています。

(永田)

よろしゅうございましょうか。多分、ご満足いただいたと思います。

(質問者)

まさに聞きたかったことをいっていただけたかなと思います。あのう、町中での図書館の
役割とかイメージっていうのが変わる可能性があるんだよというのがポイントだと思った
んで。はい、ありがとうございました。

(永田)

大変、重要な問題ですし、われわれ図書館員が基本のところの一々立ち戻る必要がありま
す。忘れがちなところですが、われわれがやっていることは、まさにオープンデータと同趣
旨の活動であります。

時間が来てしまったんですが、最後に一つだけ質問がありまして、これはちょっとお二方
に「今の日本に、未来の図書館に相応しいモデル図書館はありますか」とおっしゃってま
す。

(渡部)

シアトルの巨大な図書館とか、フィンランドは人口約 500 万人のなかで充実した図書館
網がある。そのコミュニティの図書館をモデルにしています。さらに内容はデンマークだ
とか北欧諸国の水準を私はモデルとしている。ただですね、先ほど、民間の話を伺いまし
たけど、私は基本的に民であろうと官であろうと別に構わないのです。図書館法の理
念が追求されて、なおかつユネスコの公共図書館宣言の公共図書館の使命が果たされ
て、若い司書を目指す方々が、生涯にわたってお医者さんとか、他の専門職と同様に
一生を通して仕事ができるような環境が必要です。しかしそれは賃金も例えば教員並
みに保証されることが前提となる。それが叶わないとすれば、私はどこかに無理が
あると思っています。誰も犠牲にならない「三方よし」の精神の具現化です。以上
です。

(吉本)

これはまた難しい質問で、あのう、もちろんこうモデルとなる図書館、これもよく
質問される「最近どこか良い図書館ないですか」みたいなこと聞かれるんですけど、
僕の立場からいうと、もう図書館は OPAC の応答速度でしかみていないということ
でして、まあ、という逃げなんですけど。これはなにかというと今日本において検索
速度が一番速い OPAC は、長野県の白馬村です。これ 3 年ぐらいつとトップで、
もっている本も少ないんですけども、検索がちゃんと出てくるか別として、一瞬
で出てくるということです。

まあこんな速い OPAC、カーリルはそんなに浅いところしかみていないかもしれない
んですけども、なんていうんですかね、ぶっちゃけた話、モデルはどうでもいいか
なあって気しています。なにかここを視察してまでしようとかいうんですけど、
武雄とか見て、まあも

うちよつと怒られるかもしれないか思いながらもやれる環境，要するに怒られるかもしれないけれどもやっちゃえるような環境ができてくることっていうのがすごく重要です。ちょっとそこは僕一番残念なのは，図書館ってこうあるべきみたいな議論があつて，これやっちゃうと怒られるかと，もし思っている人がいたとしたら，それが一番残念かなと思っています。

だから，もっといろいろなトライがあつてよいし，失敗があつてよいし，図書館いっぱいあるので，やっぱり自律分散協調で失敗してゆきたいなというふうに，失敗もむしろ失敗ができる図書館ってことが，とつても救いだなってことを強く感じているということです。

(永田)

ありがとうございました。時間が来てしまいましたので，残念ながら，このあたりで会合を閉じたいと思います。

本日は，お二方の講演者，渡部さん，吉本さんには，遠方からお運びいただき，大変興味深いご講演とディスカッションをしていただきました。改めて皆さまから拍手をお願いしたいと思います。またディスカッションに質問の形で，あるいは口頭の形でご参加いただいた皆さま，残念ながら参入されなかったものの，熱心に耳を傾けて下さった皆さま，本当にありがとうございました。

なお，アンケートに記していただくとありがたいです。お急ぎの方は，できれば後日 FAXでお送りいただいても結構でございます。

本日は，皆さま改めて大変ありがとうございました。できればこの催しを来年も催したいと思います。また来年もよろしく願いいたします。

まだ雨は降っていると思いますが，お気をつけてお帰りください。